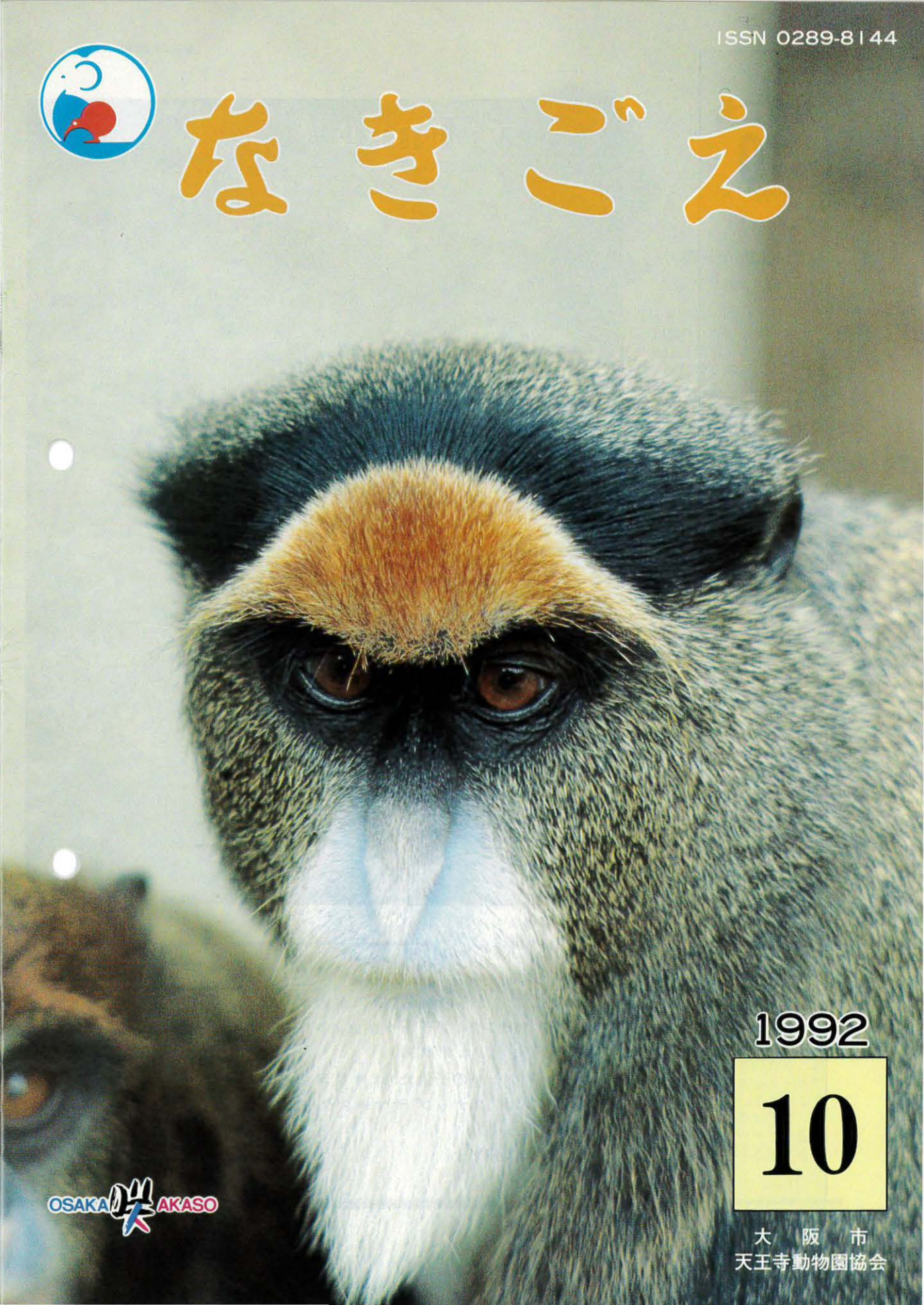
ISSN 0289-8144

なきごえ



1992
10

OSAKA 咲 AKASO

大阪市
天王寺動物園協会

なきごえ
10
1992

もくじ

2 — New Face　レアの赤ちゃん
3 — 動物と私 コウモリの飼育（前田喜四雄）
カバーウォッチング　ブラッザグェノン
4 — 耳を澄ませば（土井歓晃）
6 — サマースクールの子供たち（榊原安昭）
8 — グラフZOO　スナップ サマースクール
10 — 獣医室から ㊽
11 — ZOO DIARY

カバーウォッチング

ブラッザグエノン
サル目　オナガザル科
Cercopithecus neglectus

アフリカ大陸中央部の森林などにすむ、色彩豊かな美しいサルです。雑食性で種名は、イタリアの探検家ド・ブラッザに由来します。
（撮影：吉本昌俊）

動物と私

コウモリの飼育

前田喜四雄さん
（奈良教育大学助教授）

「コウモリを拾ったので飼育したいが、どうすればいいのか？」という質問をよく受けます。これに対して、私は「不可能だから止めなさい。」と答えることにしています。しかし、真実を詳しく述べるならば、これは正しくありません。

コウモリにもいろいろな種類があります。多くが飛翔している昆虫類を捕って食べます。一方、果物を食べるコウモリもいれば、血をなめて生きているコウモリもいます。私が相談を受けるのはすべて昆虫を食べるコウモリです。というのは、日本に生息するコウモリ30種あまりのうち、小笠原と南西諸島にだけいる２種のオオコウモリを除いて、すべてが昆虫を餌としているからです。

ヨーロッパや北アメリカにある大きないくつかの動物園を訪れたことがあります。さまざまな動物が飼育されていました。かつての日本の動物園ではあまり飼われていなかった、どこにでもいるが本当はあまり知られていないイエネズミやノネズミが珍しいものでした。一方、コウモリはといえば、果物を食べるコウモリばかりで、血を餌にするいわゆるチスイコウモリがいくつかの動物園に飼育されていればよい方でした。

これらのコウモリは果物や動物の血を飼育ケージの床に入れておけば、自分でその餌を食べるようになるので、飼育が簡単なのです。しかし、飛翔する昆虫を食べるコウモリはこんな具合にはいきません。食虫性のコウモリは飼育ケージの中に餌の昆虫を入れても決して自ら食べないのです。お腹がすいてもがんこに餌を食べないで、結局餓死してしまいます。もっとも、中を自由に飛び回れる非常に大きな飼育ケージに、500～1000匹もの昆虫類が常に飛翔しているような環境を作りだせば、おそらく飼育可能だと思われます。

動物園でコウモリだけを飼育するのが目的ならば話は別ですが、１匹のコウモリのために500匹以上の飛翔する昆虫を毎日用意するのは不可能に近いことです。しかし、私はこの昆虫類を餌とするコウモリの飼育に何度も挑戦したことがあり、以下がその経験談です。

コウモリが地面においてある動かない餌を食べるようになるには、ねばり強い「餌づけ」が必要です。普通いきなりコウモリの口に餌となる昆虫をもっていっても決してそれを食べません。最初は口をこじ開けて、むりやり口の中に餌を入れてそれをつぶします。そうすると、個体によってはそれをかんで食べます。食べない場合は同じことを何回でも試みます。食べだせば、一歩前進です。そのうち、口のそばに餌をもっていっただけで、自ら餌をくわえて食べるようになります。二歩前進。そうなると、その餌づけを毎晩（毎日）行います。それとともに、餌を地面の容器に入れておきます。コウモリは普通自分の体重の半分以上の生き餌を毎晩食べるので、ある程度の餌を与えようと思うと、餌づけ時間は１匹に１～２時間もかかります。それでも、うまくいくと個体によっては１週間もしないうちに、自分で地面の容器においた餌を食べるようになります。餌づけ成功です。それが２週間かかる場合も、また１か月以上かかる場合もあります。しかし、多くの場合は、１か月たっても２か月たっても結局地面においた餌を自分で食べるようになりません。それでも、十分の餌を時間をかけて毎晩与えていれば死ぬことはありませんが、結局は餌づけ時間を十分とれなくて死なせてしまうことになります。餌づけの成功は個体差にもよりますが、もちろん種の差異によっても大いに異なります。いずれにしても、地面においた餌を食べるようにしつけるには大変な努力と忍耐が必要です。

続いてその餌の問題です。かつては、イエバエを飼育してその「蛹」を餌にしていました。蛹は地面においた容器に入れておいても逃げず、しかも生きているので都合がよいのです。しかし、これにも問題があります。これだと、大型のコウモリなら１匹で一晩に1000個の、小型の種でも200個の蛹を食べます。毎日これだけの蛹を用意するのは大変な時間と努力を要します。そのため、最近はペットショップで買うことができるミールワームを用いており、餌は作りださなくてもよくなりましたが、餌づけは相変わらず必要です。

かくして、昆虫を餌にしているコウモリを飼育しているのは、前田動物園だけということになります。

レアの赤ちゃん　レア目　レア科

８月18日生まれのレアの赤ちゃんです。今年は７月31日を皮切りに６羽のヒナがふ化し５羽が成育しています。この日、撮影のため初めて屋外に出ました。雑草を引っぱったり、枯葉をくわえたりと大はしゃぎ、元気に育っています。

耳を澄ませば

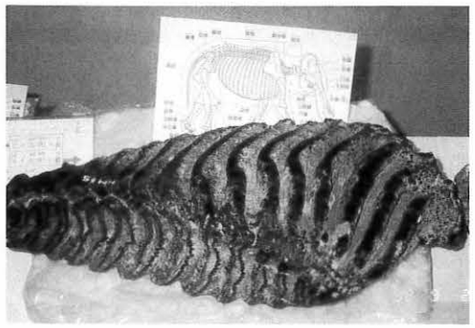
土井　歓晃（西山浄土宗　鶴舞山宝樹寺副住職）

当寺は、寺名を宝樹寺、別名化石寺または石の寺と呼ばれており、庫裏の３階に化石の展示室があります。ナウマンゾウの化石や古代のシカの化石、それにアンモナイトの化石などを展示しています。春や秋の観光シーズンには、高校の地学部の生徒や小中学校の社会見学など、団体の見物客もよく訪れます。部屋はそんなに広くはありません。日本間にすれば８畳ぐらいの広さですので、30名以上の団体客が訪れる時には、交替して見学していただく時もよくあります。そんな中で、一番かなわない団体客は、小さな子供たちの団体です。「わいわい、がやがや」の中、引率の先生が集合をかけ、引き上げた後よく見ると展示室内の小さな石や化石が姿を消していることがよくあります。

ほんの少しの悪戯心で、たくさんの方々に眺めてもらいたいと思っている石や化石が、ポケットやカバンの片隅に隠れて、姿を消してしまうのです。そういう訳もあって、当寺では連絡のない拝観者や、引率者のいない子供たちの拝観は、一応お断わりしています。縁あって、さまざまな方面から集まってきた展示品が、いつまでも居心地よく座っていて欲しいからです。

ナウマンゾウと古代のシカの化石にはＨＭという記号が打ってあります。これは学術的に貴重なものなので、通し番号をつけて学会に登録しているものです。ちなみにＨは、当寺、宝樹寺の頭文字を表しています。点数にして数百点を数える化石がありますが、展示室のスペースの都合で、すべてを展示できないのが残念です。

また、ナウマンゾウに関しては当寺には頭部の化石だけがありません。30年程前に、一度地元の漁師の方によって、発見されたという報告を受けたことがありますが、未だに頭部の化石は展示室には届いていません。発見当時の状況の報告では、朝早く、出漁して間もない第一投の底引き網に大きな岩のようなものがかかったということです。漁師の方は「寺の住職が言っていた象の頭の部分ではないか。」と考え、持って帰ってやろうとしたらしいのですが、生憎、朝一番のことだったので、「こんな大きなものを積んでいては漁はできない。」と判断し、もう一度海にもどし、場所を確認して再び出漁し、夕方、その場所に再度網を入れたらしいのですが、大阪湾の海流はかなり流れが速いところがあるので、結局、何度か網を入れたらしいのですが、再び網の中にはもどってはくれなかったとのことでした。



後日、某テレビ局が取材に訪れた時に、その話をしますと、非常に興味を示され、ぜひともその海域で挑戦したいとの申し出があり、漁船を借りて例の漁師さんの水先案内にて、テレビカメラを搭載して挑みましたが、結果は残念なことに頭部の化石は発見できませんでした。

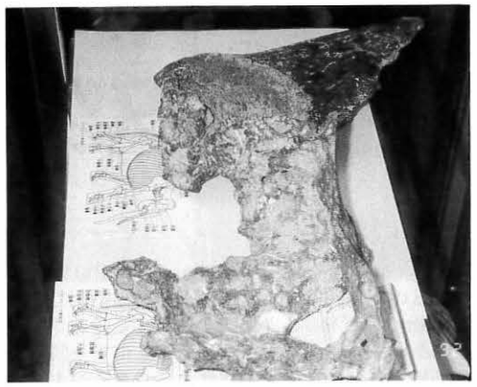
それから、約１年後に某テレビ局の方が、今度は潜水艇を使って再挑戦したいと訪れられました。最新科学の力を借りて、今度は成果の期待大と、はりきって挑みましたが、潜水艇で潜ってみると、大阪湾の海水の透明度は低く、海流の速度もかなり速いため、またまた残念な結果に終わりました。そういう訳で、未だにナウマンゾウの頭部の化石のない展示室となっています。

古代のシカと現代のシカとの違いですが、角の根元に円周状にコブ状の突起があるのが、古代のシカの特徴です。昔、瀬戸内海が陸地であった頃、たくさんのゾウやシカがこの地域に住んでいました。

ここで、少しシカについて興味深い話があるので紹介することにします。古老(漁師)に聞いた話なのですが、その昔、友ヶ島（地の島、沖の島という２島がある。）は軍事的役割をおびて要塞として利用されていたため、人が住んでいませんでした。当時、両島にはたくさんのシカが住んでいました。そのシカの群は、“地の島”の草を食べつくしてしまうと、隣の“沖の島”に渡り、草を食べるのですが、あいにく両島の間の海流は速く、時には渦潮の巻く海域なので、海を渡る際には、１頭のリーダー格のシカが岩壁に立ち、口には１本の枯れ枝をくわえ、じっと潮の流れを見つめていたといいます。それから、流れがゆるやかになったとみるや、その口にくわえた枯れ枝をパッと海に放ち、枯れ枝が静止していると見るや、やにわに海に飛び込み、“沖の島”を目指してまっしぐらに泳ぎだします。その後を何十頭ものシカの群が続いていったといいます。生きるために何年もかかって見いだした生活の知恵なのでしょう。だが、その方法を見いだすまでに、どれほどの犠牲をはらってきたのでしょうか。進化と知恵の長い歴史的時間の中で私達人間も、またいろいろな危ない食物を口にしてきたことを考えると、この古老から聞いたシカの話も生きるということに対するすごさを感じさせられる話だと思います。

話をもう一度、化石の展示室にもどしましょう。ある日、年老いた男の人が一人でやって来られ、「すみませんが、ちょっと石を見せて欲しいのですが。」と言われました。そこで、父が「どうぞ」と言って、３階の展示室に案内したところ「私は体が弱いので」と言われ、ゆっくりと時間かけて３階に上がられ、石を眺められたとのことでした。その人が帰られた後、父が階下に降りてきて、満足そうに「あの人はすごい人みたいだったなあ。」と一人で何かほくそ笑みながら、つぶやきました。私が「何がすごいのですか。」と聞くと、「いや、あの人な、土のかぶった隅にころがっている古谷石の前で動かへんのや。それも、じっとしてな。それを見てると、何かうれしなってきてな。」と、またほくそ笑んでいるのです。それでもう一度「何で」と聞くと、「いやあ、今まであの石をあれだけじっと見入った人はおらんのや。この人だと、本当に石の友になれると思うと、自然とうれしくなってきてな。」と言うのでした。それで、別れ際に、「また、訪れてください。」と言うと、相手の方もにっこりして、「はい。」と言って帰られたということでした。

実は、父は“石に叱られて”という書を出版しています。その中にも記述していますが、展示の精神は次のとおりです。当寺では、展示室以外にもたくさんの水石を展示しています。それも、種々雑多に展示しています。よく、人から「住職さん、こんなにたくさんある石、種類ごとに並べられたらどうですか。」と言われますが、父は頑として受け入れません。その理由は『石が語ってくれる。』ということなのです。人は誰でも興味のあることに、目がいくものです。父の論法は、それ故に種々雑多に並べているとのことです。来訪した客に対し「あなたの趣味はいかほどのものでしょうか。



深いのでしょうか。浅いのでしょうか。」とはたずねにくいものです。しかし、無整理の状態で水石を展示していますと、来訪客は興味のある石の前で目がとまります。そうすると、その石がメノウなどの原石であったとしますと「ははあ、この人は、こういう光り物の石が好きなんだな。」と、壺石に目がとまると「この人は、お茶やお花をたしなんでいるのでは…。」などと、自然とわかるものだといいます。しかし、土まみれの一見何の変哲もない水石に目がいき、時には座り込むような方が来ますと、父は心をわくわくさせながら、緊張するといいます。毎年、たくさんの来訪客がありますが、父に言わせますと人の趣味の浅深は、その様子で99％当たると公言しています。まさに『石が語る。』ということです。

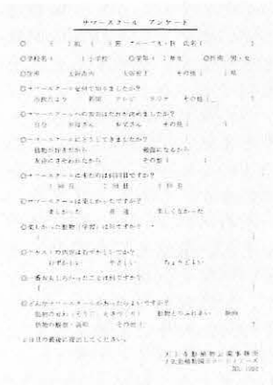
話は変わりますが、私は、「みさき野鳥の会」の事務局を担当しています。岬町は、まだまだ未開発の自然豊かな山林もかなり残されており、タカや冬の水鳥など、大型の野鳥もかなり生息している地域です。バードウィークの期間などには、仲間と連れだって、のんびりと双眼鏡を手にオゾンを胸いっぱいに吸い込む時の快感はたまらないものです。そんな私の寺に、時に不自然な贈物を受ける時があります。それは、野鳥の剝製を寄贈したいという信者からの申し入れがあった時です。「住職、この剝製は昔から家に飾ってたんやけど、寺の応接室に寄付しよ思て。」と持って来ていただいた時など、坊主としてその純な心を受けさせてもらいますが、なんといっても代物が野鳥のミイラですから困ってしまいます。合掌して本当にありがたく、それを受けさせていただくのですが、生きていたなら、まだまだ青空を飛べたのにと思うと、何かしら切ない気持ちになってしまいます。矛盾をもったまま、人の目に触れない青空の見える部屋に保管している次第です。

もうすぐ、探鳥会に最適のシーズンが到来します。いつまでも、残された自然の中で、鳥達の大空を駆け巡る雄姿を眺め続けたいと思う今日この頃です。

耳を澄ませば、太古の昔から生命の脈々たる流れが、大河のごとく体感できるように、更なる不思議との出会いを期待し、ペンを置くことにします。

サマースクールの子供たち

今年も恒例のサマースクールが７月21日から26日の６日間行われ、子供たちが動物園で楽しく動物の学習をしました。子供たちには終了時にアンケートを書いてもらっていますので今回はその結果をもとに子供たちがサマースクールをどのように感じていたのかをのぞいてみたいと思います。



アンケート用紙

サマースクールは今年で18回目を迎えましたが、一貫して小学校４年生、５年生、６年生を対象に行ってきました。期間や内容を毎回少しずつ変更しながら現在の形に落ち着いたのですが、昨年からは４年生が「草食動物と肉食動物」、５年生が「サルと夜行性動物」、６年生が「鳥類・爬虫類」をテーマに動物の学習をしています。各学年それぞれ20人の子供たちが２日間の日程で動物の飼育実習や動物の学習をし、同じスケジュールを３回くりかえし実施しています。

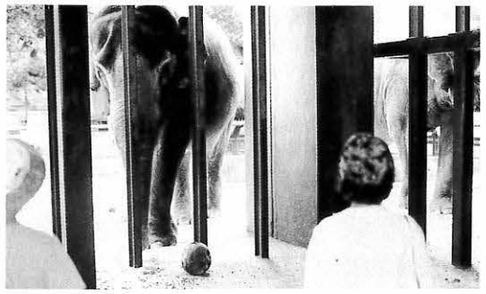
まずは、参加者の内訳ですが３組で177人の参加者がありましたが、男子が34.7%、女子が65.3%と女子の参加者のほうが多い結果となりました。

参加者の住所は大阪市内が78.2%続いて大阪市を除く大阪府下15.2%と両者を合わせ93.4%とほとんどが大阪府下からの参加者でした。そのほか奈良県、兵庫県からの参加者が少数あり、遠く茨城県から新聞でサマースクールのことを知り兄弟２名で参加された方がいらっしゃったことには驚かされました。

次にサマースクールがあることを何で知ったかですが、大阪市の広報誌である“市政だより”が最も多く38.8%、続いて新聞26.4%、友達16.4%となっています。

サマースクールへの参加を決定したのは、“自分で決めた”が61.7%、“親”が34.6%（母31.7%、父2.9%）、友達にさそわれた”が2.3%となっていました。半数以上の参加者が自分の意志で参加してくれたのはうれしいことです。

サマースクールへ参加した理由は“動物が好きだから”が一番多く67.4%でつぎに“友達にさそわれたから”が13.8%、勉強になるから”は12.7%でした。学年別にみると４年生では全体平均に比べて“動物が好きだから”が少し減り、“友達にさそわれたから”“勉強になるから”が少しずつ増加しています。５年生では“動物が好きだから”が増加し78.5%となり、その分“勉強になるから”が減少し5.3%になっています。６年生では“勉強になるから”と“友達にさそわれたから”が逆転しそれぞれ16.9%、10.7%となっています。学年が低いほど友達に誘われて参加した傾向が強いといえるでしょうか。



ゾウのスイカ割り

参加回数は対象が４年生から６年生ですので４年生はもちろん全てが初めてですが、５年生では２回目が14.8%、６年生では２回目が15.2%、３回目が3.3%で併せて18.5%と同じ子供が参加する割合は我々がこれまで予想していた教字より意外と低い数字でした。これは毎年応募者が多く４～５倍の競争率になるためでしょう。

さて、次に実施内容に関する子供たちの感想ですが、全体では86.4%が“楽しかった”と答えています。学年別にみると４年生では91.2%、５年生では88.8%、６年生では79.6%と学年が上がるにつれて減少しています。これまで以上に学齢が上がるにつれて内容を高度にしていく必要があるように思われました。

楽しかった動物については各班学習した動物が違いますのでそれぞれ違いますが、身近に観察した動物や直接触れ合った動物などが印象に残ったようです。一般に人気のある大きな動物や、猛獣などの強い動物をあげた子供も多くありました。

４年生ではカバが20.3%と一番多く、カンガルー15.6%、キリン14.1%、トラ11.0%と続いています。５年生ではインドオオコウモリやフクロギツネなど個々の動物名をあげた子供たちもありましたが、それらを含めて夜行性動物と答えた子供が多く、合わせて43.9%に達しました。続いてゴリラ22.7%、サル18.1%でした。６年生は鳥類・爬虫類を勉強しましたが、これらの動物は子供達にとってなじみが薄いためか特定の種名をあげた子供は少なく、鳥類、爬虫類と答えた子供がほとんどでした。爬虫類をあげた子供の合計は42.0%であり内訳はヘビが17.4%、カメが10.1%その他の爬虫類8.7%、単に爬虫類と答えた子供が5.8%でした。一方、何らかの鳥類と答えた子供の合計は36.2%で、内訳はペンギンが14.5%、その他の鳥類の種名をあげたのが7.2%、単に鳥類と答えた子供が14.5%でした。

テキストの内容はイラスト多く取り入れ、できるだけやさしい内容になるように心がけましたので、“ちょうどよい”が75.8%で、“やさしい”を合わせると94.0%にのぼり、ほとんどの子供たちが理解してくれたようです。

一番おもしろかったことをたずねたところ、当然のことながら、楽しかった動物とかなり一致するものでした。４年生ではカバの運動場に入って身近にカバを観察し、飼育担当者の指導でカバの口元に触った印象はたいへん強烈だったようで20.3%の子供があげています。次にゾウが餌を食べるところを観察したことをあげた子供が18.8%ありました。粉状の餌であるフスマ、粒状の餌であるペレット、もう少し大きなリンゴを鼻を使ってじょうずに食べたゾウが、鼻では巻き上げられない大きなスイカを足を使ってうまく割り、じょうずに食べたことが印象に残ったのでしょう。

夜行性物動物の餌の調理

ダチョウの卵の容積測定

ゴリラ舎の寝室見学をする子供たち

スイカを割るために足に適度の体重をかけ、スイカがペシャンコにならないように割ったゾウのかしこさにも子供たちは感心していました。そのほか、キリンに直接手渡しで餌を与えたことが12.5%、身近にライオンやトラを見たことの強烈な印象が10.9%ありました。

５年生は、夜行性動物舎で小グループに別れて実習しましたので、インドオオコウモリやセスジスクスクスなどの動物名を上げた子供もいましたが、それらを合わせて、夜行性動物舎の掃除、餌の調理、餌を与えたことをあげた子供が実に半数近い46.9%もありました。次にゴリラの寝室見学が19.7%ありました。普段、入ることのできないゴリラの臭いの残る寝室の中に入り、しばし、ゴリラになった気分で喜々としていた子供達の顔は印象的でした。おもしろ、おかしくビンゴゲームをしながらクイズ形式でサルの説明を聞いたのもおもしろかったようで、9.8%ありました。

６年生では対象動物があまりなじみのない鳥類と爬虫類であったせいもあるでしょうが、きわだったものはあまりありませんでした。アオダイショウを触ったことをあげた子供が17.1%、ワライカワセミのペリット（口から吐き出した不消化物で餌のマウスの毛や骨が含まれている。）を分析したこと14.3%、ペンギンを間近で観察し餌を与えたり、体に触れたりしたことが11.4%、“鳥の楽園”で望遠鏡を使って鳥の餌を食べる様子を観察したことが5.7%、ダチョウやエミュウなどの大きな鳥の卵の大きさや容積を計測したことが5.7%などがありました。

全体を通して見てやはり、やはり実際に動物に触れたり、自分の体を動かして掃除をしたり、餌を作ったりすることに人気があったようです。

最後にどんなサマースクールがあったらよいかという質問に対してはやはり直接にかかわることのできる動物の飼育実習や動物の触れ合い希望するものが多く、飼育実習が43.5%、触れ合いが41.6%で合計85.1%をしめています。やはり、より学習的な動物の観察・説明や映画はあまり人気がないようです。

今年はたいへん暑い日が続きましたが、無事にサマースクールを終了することができました。今回のアンケート調査の結果を参考に来年のサマースクールはよりよいものにしていきたいと思っています。

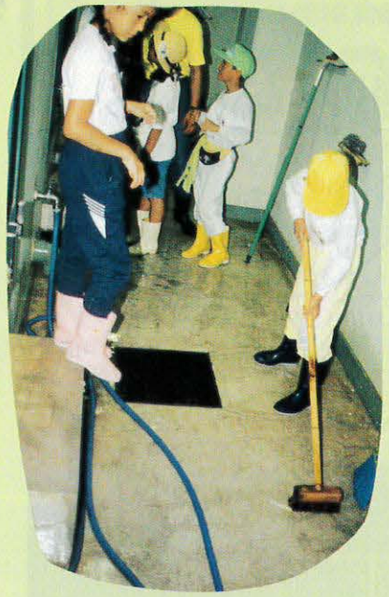
（飼育課：榊原安昭）

なきごえ28(10).1992

ゾウ舎の中に入って飼育係さんからお話を聞きました。「ゾウって思っていたより大きいなあ。」

サル舎ではビンゴゲームをしながら[illegible]の説明を聞きました。「ぼくは、ビンゴが５つもできたよ！サル博士だい。」

まとめの学習。「シシオザルはインド、ニホンザルは日本に住んでいます。簡単だい。」



夜行性動物舎では飼育実習。「ぼくたち、動物のためにピカピカにするんだい。」

グラフZOO
スナップ サマースクール

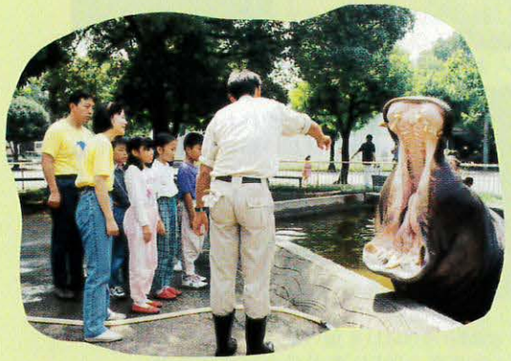
夏休み恒例のサマースクールが今年も開催されました。動物のことをいろいろと学ぶ子供たちの顔は、誰もが夏の光に輝いていました。

（撮影：前田　茂）

ダチョウの卵の計測中。「これで６杯目、まだまだ入るのかなあ。」

“島の楽園”ではバードウォッチング。「鳥が近くに見えるぞ。すごいなあ。」

カバ舎に入って説明を聞きました。「わあ、カバの口はでっかいなあ。」



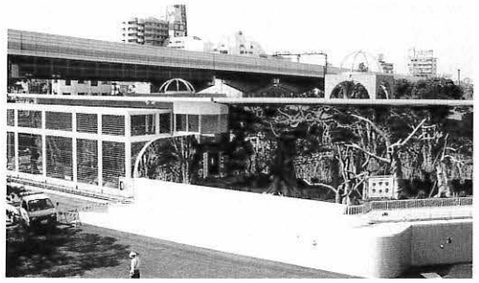
２日間のサマースクールが終り、終了証をもらいました。「楽しかったなあ。来年もまた来たいなあ。」

獣医室から

58

引越は引越しの…

今年の８月10日、新しいチンパンジー・オランウータン舎が完成しました。場所は南園のキリン舎とアシカ池の横、ちょうど新世界ゲートを入ってすぐ右手のところです。



完成した新チンパンジー・オランウータン舎

さて、新しい動物舎ができれば次は引越しです。動物舎が完成する以前から数回にわたって関係者による引越し準備検討会議を開催し、綿密な計画を立てました。

現在当園で飼育しているチンパンジーは、日本最高齢43歳の雌“シュジー”を筆頭に、10歳の雌“アップル”、９歳の雄“リッキー”、８歳の雌“ミナミ”、５歳の雌“ミツコ”の計５頭です。オランウータンは26歳の雄“ブル”、21歳の雌“サツキ”、“ブル”と“サツキ”の仔で６歳の雄“サブ”、５歳の雌“モモコ”の計４頭を飼育しています。

引越し会議の結果、引越し日は８月17、18日の両日とし、17日の休園日にはチンパンジーの“リッキー”、“アップル”、“ミナミ”を麻酔して、“ミツコ”とオランウータンの“サブ”と“モモコ”を飼育担当者が手を引いて移動させ、18日は残りのチンパンジーの“シュジー”は檻捕獲し、オランウータンの“ブル”と“サツキ”は麻酔して移動させることにしました。

引越し１日目、まず飼育担当者によって“リッキー”、“アップル”、“ミナミ”、“ミツコ”に鎮静剤を飲ませることにしました。鎮静剤を使うのは“リッキー”、“アップル”、“ミナミ”の３頭が既に吹矢による麻酔を経験していて、吹矢の筒を見ただけで暴れるからです。また、“ミツコ”は今年導入した個体で、環境の変化に対応できるよう現在馴致調教中だったからです。

鎮静剤を飲ませた後、飼育担当者が“サブ”、“モモコ”、“ミツコ”を順次移動させようとしましたが、“ミツコ”の鎮静剤の効きが悪く、結局“ミツコ”は麻酔して移動させました。“リッキー”、“アップル”、“ミナミ”は鎮静剤投与後、その効果を見ながら吹矢で麻酔薬を投与し、麻酔が効いたのを確認して動物病院に移動させました。通常触ることの出来ない成獣たちの検査のためです。“リッキー”、“アップル”、“ミナミ”は触診や血液検査、レントゲン撮影などの検査後速やかに新しい動物舎に移動させ、引越し第１日目は驚くほどスムーズにゆきました。

引越し２日目。朝から雨が降ったりやんだりでちょっといやな予感が…。昨日同様うまくいくことを願いながら引越作業を開始しましたが、こういう時の予感はえてして当たるものです。

檻捕獲をする予定の“シュジー”が、普段と様子が違うのを察知してか、いっこうに檻に入ろうとしません。歳をとっているので麻酔をしたくなかったのですが、仕方なく麻酔して移動させました。

“シュジー”の捕獲と併行して行っていた“ブル”と“サツキ”の捕獲にも事件が発生しました。投与した鎮静剤がほとんど効きません。悩んでいても始まらないので、直接吹矢を使って“ブル”に麻酔薬を投与しようと寝室に筒の先を入れた瞬間、物陰から“ブル”と同居中の“サツキ”の手がスッと出てきて筒を取られてしまいました。この筒は“サツキ”の手から“ブル”の手へと渡り、もはや獣医では取り戻すことは出来ません。飼育担当者が駆けつけてくれ、やっと取り戻すことができたのですが、アルミでできた丈夫な筒はまるで針金のように折れ曲がっていました。代わりの筒でようやく麻酔薬を投与し、移動しました。全く踏んだり蹴ったりの一日でした。

新しい動物舎で慣らし中のチンパンジーたち

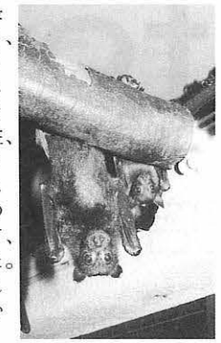
こうして、どうにかこうにかチンパンジーとオランウータンの引越しが終わり、この原稿を書いている今は彼らを新しい動物舎に慣らしているところです。９月上旬から一般公開をしています。引越の苦労話を思い出しながら動物たちを眺めるのもなかなかおつなものですよ。

（飼育課：森本委利）

８／１．今季初のブラックバックが１頭生まれました。

８／２．夏期の獣医専攻大学生の動物病院での実習が始まりました。

８月３日 インドオオコウモリが１頭生まれました。当園では夜行性動物舎がオープンして以来、３回の繁殖を経験していますが、２年以上成長した例がまだなく、今回はぜひ長生きしてもらいたいものです。当園のオオコウモリは現在、おとなのオスが３頭、おとなのメスが５頭で、今回の赤ちゃんを加えて、９頭になりました。生まれた赤ちゃんの性別はまだわかっていません。



８／６．ヤマネコ類の検便を実施しました。

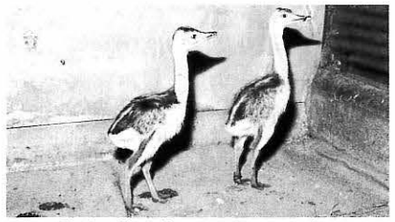
８／12．オウサマペンギンが産卵しました。

８／15．サル・ヒヒ類の検便を実施しました。

８月16日 「ゾウのふれ愛ガイド」を、ゾウ舎前で実施しました。アジアゾウ１頭が１日に食べる実物のエサや今朝した糞を前に、飼育担当者がゾウのお話をしました。また、ゾウの食べ方をみるためにスイカやリンゴを与えてみたり、入園客の方にお願いしゾウに水をかけていただいたりして、ゾウの行動を観察していただきました。

８／17．新チンパンジー・オランウータン舎が完成したため、旧動物舎からチンパンジーとオランウータンを２日間かけて移動させました。

８月23日 レアのヒナが１羽ふ化しました。今年５月８日から産卵が始まったレアは、合計10卵を生みましたが、親が抱卵しなかったことから電気ふ卵器で人工ふ化させています。この日ふ化したヒナを入れて６羽がふ化、内５羽が順調に育っています。レアの卵の重さは500から580g で、生まれたヒナの体重は300g 余りでした。



今月もおもしろ情報満載

ZOO DIARY

ふ化日数は平均42日でした。

８月29日 富山市ファミリーパークからヒメネズミ２つがいとカヤネズミのオス１頭とメス２頭をいただきました。当園では、夜行性動物舎でヒメネズミとアカネズミを展示してきましたが、今ではヒメネズミ１頭残るのみでこれも飼育期間が３年半をすでに過ぎ老齢となってきたため、新しく導入したものです。カヤネズミ（写真）は日本に住むネズミでは、最小種の部類に入るもので、当園では開園以来初めての展示となります。

８月29日 今季７頭目のブラックバックが生まれました。前回は今年に入って冬季に10頭が生まれていることから、まだもう少し生まれることを予想しています。これまでに生まれた赤ちゃんの性別はオスが１頭、メスが６頭です。子供たちはすべて成育していますが、内１頭が後足を脱臼し現在治療中です。これでカモシカ園のブラックバックの群れは29頭になりました。

☆テレホンサービス：771－9999

☆お知らせ

- 動物園のおじさんのお話
  “動物の餌のお話”
  日時：10月18日(日)、午後１時～２時
  場所：レクチャールーム
- 秋の動物と花のフェスティバル
  10月18日～11月８日(日祝日)

愛ある暮し、応援します。

Kintetsu

近鉄百貨店

DEAR LIFE BOOKS

生態・飼育・図鑑が一つの本の中にギッシリ

中川道朗・岩合徳光／監修
B５変型判・オールカラー
定価600円

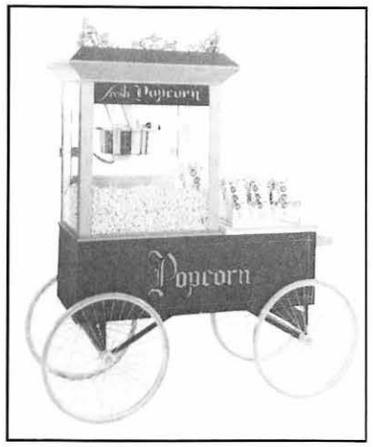
動物園で暮らす様々な生き物達、自然の中ではどんな暮らしをしているのか？　動物園での世話の仕方は？　仲間は？　など、写真と精密イラストをまじえ紹介します。

くらしとかいかたシリーズ＜既刊本＞
B５変型判・オールカラー・各定価580円

むし くらしとかいかた
野山でみかける身近な昆虫たち250種を紹介。

ちいさないきもの くらしとかいかた
昆虫以外の小さな生き物を３２０種紹介。

お求めは、お近くの書店で。　ひかりのくに株式会社　本社／〒543 大阪市天王寺区上本町3-2 ☎06-768-1151代表



マスダのポップコーン

マスダ　いつでもどこでもポンポンポン

〈営業品目〉　製造機械・保温機　他
生コーン・袋詰ポップコーン・原材料一式

㈱増田食品　〒561 大阪府豊中市穂積1-10-30　TEL (06)865－0165

オートフォーカスカメラに

フジカラー SUPER HG 400

ピントが合いやすいフイルムです

カメラの大林
桜橋本店　☎341－8091
阪急三番街店　☎372－5031
OHVAC店（ギャレ大阪）　☎346－7606

全国の愛犬家の共感を呼ぶ無比の愛犬歌集　絶賛四版

歌集犬の歌　平岩米吉著

著者が、約四十年の間に、共に暮らした七十余頭の犬の生と死を歌った四百十九首を収録。同時に、その誕生より老齢に至る写真四十七図を収めた、犬の一生の生態写真集でもある。

天金・美装箱入
Ｂ６判・270頁
3000円・〒不要

《感動の言葉》
☆この歌は愛犬と異体同心の境地である。（英文学者）
☆人として注ぎ得る愛情の極致を示している。（動物研究家）
☆一首ごとに、ことごとく魂にひびく歌です。（動物愛護家）

●本書は、書店ではお買い求めになれません。直接当会へお申し込みください。

〒152／東京都目黒区自由が丘3-12-2　動物文学会　電話(03)717-1659／振替・東京5-9800

新作
貸出用ビデオ「楽しい天王寺動物園」
19分（10本常備）

天王寺動物園の本

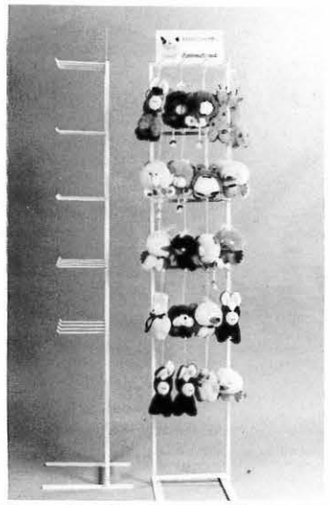
入園の記念・手引に……

●対　　象／保育園・幼稚園・小学校の先生
●貸出期間／10日間
●貸 出 料／無料（但し郵送料480円は必要）
●申 込 先／当協会まで手紙かハガキでお申込下さい。

コアラテレホンカード（限定販売）
好評発売中　¥800（50度用）

オールカラー
500円
園内売店にあります。

大阪市天王寺動物園協会　〒543 大阪市天王寺区茶臼山町6-74 ☎(06)771-0201

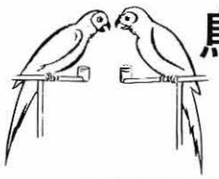


動物ぬいぐるみは 子供のゆかいなお友達

各種ぬいぐるみ企画・製造・卸

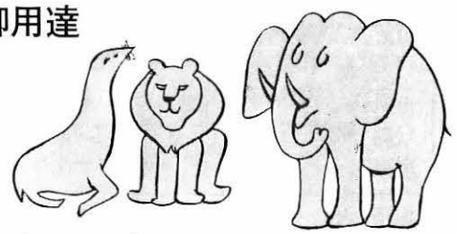
有限会社 **アニメランド**

〒547 大阪市平野区西脇４丁目５番22号
TEL：(06)704－８５８０
FAX：(06)704－８５６５



鳥獣輸入

全国動物園水族館御用達

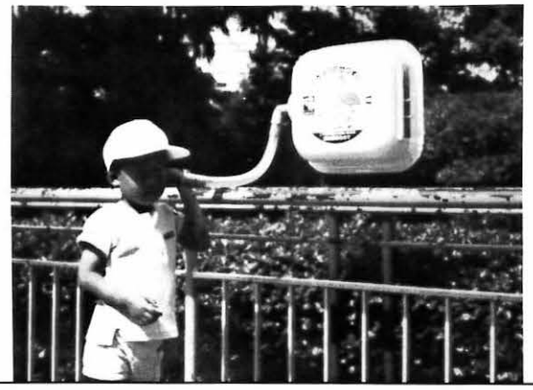


- 医学実験用動物
- 宣伝用、テレビ用、貸動物
- 原色世界雉類図鑑（34種1枚もの）要郵便券250円

有限会社 **吉 川 商 会**

本　社　神戸市中央区中山手通３丁目11番４号　電話(078)221-8195㈹
飼育場　兵庫県小野市来住町１５１３番地

たのしい〝動物のお話〟は、ガイドマシン（動物説明機）で、どうぞ!!



園内、主要動物舎
30数ヵ所にあります

関西特機株式会社
電話 06-762-2333
1回　20円

動物園内での お食事、ご休憩は

動物園内……

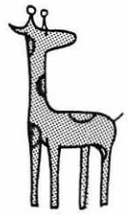
中央売店

TEL 06-771-0973

お食事・飲もの・おみやげ

動物園内
南園売店 TEL 06-771-7110

園内でのお写真は…
動物園協会指定写真部へご用命下さい!!



◎随時係員が待機しておりますのでご説明に伺いました際は、よろしくお願い致します。

カラー写真 キャビネ1枚 **500円**

撮影無料にてキャビネ1枚をサービスさせて戴きます。
撮影予約も受付しておりますのでご連絡下さい。

国際航空写真株式会社
ＴＥＬ 06－856－7444

雪印

Our yogurt has fruity and rich texture!!

"生イキヨグール"と覚えてね。

新発売

しぼりたてミルクのおいしさが、生きている。

雪印 ヨグール

希望小売価格　130g／各120円　250g／各220円(税別)

HIJIRI-KOJIMA

一日
愉快に
たのしめる!!

◎園内３ヶ所(南園高架下・北園中央デッキ北側・北園高架下)に各種〝のりもの〟があります。

久竹娯楽株式会社
TEL(06)541-3938(代)

なきごえ　1992年10月10日発行（毎月10日発行）第28号　第10号　（通巻326号）

編　集／大阪市天王寺動植物公園事務所
発行人／大阪市天王寺動物園協会 土井良彦
印刷所／株式会社 松村善進堂　定価150円(送料共)　1年継続(12部) 1,650円(送料共)

〒543 大阪市天王寺区茶臼山町6—74
電話 大阪 (06) 7 7 1 — 0 2 0 1
振替口座 大 阪 3 — 3 7 8 2 3

編集委員（中山良三郎／村上　昭／中尾啓一／樽本　勲／中川哲男／吉本昌俊／山根和弘／大谷直樹／宮下　実／長瀬健二郎／榊原安昭／森本委利／竹田正人／永田健一／前田　茂／大野尊信／野口秀高／早川　篤／堀内智生／大川光雄／土谷正道／山元貞幸）